

令和 8 年第 1 回一都三県サバ漁海況検討会
令和 8 年漁期サバたもすくい網漁、棒受網漁の見込み
令和 8 年 1 月 8・9 日

参加機関：東京都島しょ農林水産総合センター、神奈川県水産技術センター、静岡県水産・海洋技術研究所、千葉県水産総合研究センター

協力機関：水産研究・教育機構水産資源研究所、茨城県水産試験場、漁業情報サービスセンター

1 予測

(1) 海況

【予測（2026 年 1～6 月）】

黒潮は、3 月まで C 型で推移し、その後は N 型基調となる。

C 型時には、黒潮が伊豆諸島東側を北上するので、伊豆諸島北部海域（大島～利島及びひょうたん瀬）、三宅島周辺及び銭洲海域への暖水波及は弱まる。N 型時も、黒潮が三宅島以南を通過するとこれら海域への暖水波及は弱まる。このため、沿岸水温は「低め」～「平年並」で推移する。房総沖では、黒潮は接岸傾向で推移し、沿岸水温は「平年並」～「高め」で推移する。

漁場水温は、1 月は伊豆諸島北部海域が 17～19°C、三宅島周辺が 18～20°C 及び銭洲海域が 17～19°C で、2 月はいずれの海域も 16～18°C で推移する。

【説明】

1 月 7 日現在、黒潮は潮岬を通過後、遠州灘から伊豆半島沖を東進している。八丈島付近で向きを北東に変え、三宅島や御蔵島の東側を北上した後、房総半島の沿岸を流れている。水温は、伊豆諸島北部海域は 16～18°C、三宅島周辺は 19～20°C、銭洲海域は 16°C 前後になっている。

黒潮は、3 月まで C 型で推移し、その後は N 型基調となる。C 型時には、黒潮が伊豆諸島の東側を北上するため、伊豆諸島北部海域、三宅島周辺及び銭洲海域への黒潮系暖水の波及は弱まる。このため沿岸水温は「低め」～「やや低め」で推移する。N 型時も、黒潮が三宅島以南を通過すると、同海域への黒潮系暖水の波及は弱まる。このため、沿岸水温は「やや低め」～「平年並」で推移する。房総沖では接岸傾向で推移する。C 型時に野島崎沖で離岸することがあるが、沿岸には、断続的に黒潮系暖水の影響が見られる。このため、房総海域の水温は「平年並」～「高め」で推移する。

なお、1 月～2 月の水温は水産研究・教育機構水産資源研究所の海況予測システム（FAROMS II）等を参照した。

海況予測の考え方

黒潮流路については、12月の長期海況予報を参考にする。

2か月後までの黒潮流路及び水温は、FRA-ROMSII 等を参考にする。ただし、現況を優先する。

大蛇行型の場合

- ・漁期中は A 型流路（A 型は継続期間が長い）
- ・伊豆諸島海域は、水温高めで推移

非大蛇行型の場合

- ・西の 小蛇行の位置と規模を確認する。（都井岬に蛇行部があれば、2～3 か月後に伊豆諸島海域に到達する）。
- ・4月以降は長期予報のとおり。
- ・N 型流路の時、伊豆諸島北部海域は「低め」～「平年並」、三宅島付近は「平年並」～「高め」。野島沖の黒潮離岸距離は「平年並」。
- ・B 型流路の時、伊豆諸島北部海域は「高め」～「極めて高め」、三宅島付近は「高め」～「極めて高め」。野島沖の黒潮離岸距離は「平年並」～「やや接岸」。
- ・C 型流路の時、伊豆諸島北部海域は「低め」で暖水波及時に一時的に「高め」、三宅島付近は「低め」。野島沖の黒潮離岸距離は「平年並」～「著しく離岸」だが、伊豆諸島の東を S 字に北上する場合には「接岸」。

(2) 漁況

①マサバ

【予測（2026年1～6月）】

（ア）来遊量・漁獲量

低調であった前年並となる。

（イ）漁期・漁場

初漁は1月下旬～2月上旬に三宅島周辺となる。主漁場は、黒潮がC型で推移する間は三宅島周辺に形成されやすい。N型基調へ移行すると、大島千波や利島周辺へ移動する。

（ウ）魚体

27～36cmの3歳及び4歳魚が主体となり、31cm以上の5歳以上も混じる。

※年齢は年初に加齢し2026年1月時点を表す。魚体は尾叉長で表す。

（エ）北上期

伊豆諸島海域のマサバは、4月上～中旬頃に北上を開始し、それに伴って当海域での漁獲は次第に低調となり始める。なお、伊豆諸島以西海域（熊野灘など）へ回遊した群れについては、北上の過程で5月以降に伊豆諸島海域を通過する可能性がある。

【説明】

来遊量・漁獲量

伊豆諸島海域における2026年1～6月のマサバ来遊量は、前年並の低水準にとどまる可能性が高いと考えられる。以下で説明する統計に基づく予測では来遊量の増加が示されたが、2025年末時点に銚子漁港で水揚げされた魚体サイズ構成や来遊後の海況を踏まえると、実際の来遊・漁獲がそれに見合わない可能性が高い。

統計に基づく予測は、2010～2025年の漁獲実績と海況データの関係を基に計算したものであり、来遊前（前年10～12月）の銚子漁港におけるマサバ水揚量とマサバ南下期（前年11～12月）の黒潮系暖水の平均北限緯度を用いて算出した（表3、表4、図7）。

2025年10～12月の銚子漁港におけるマサバ水揚量は、暫定値で5,864tとなり、前年（4,833t）並であったものの、過去5か年平均（16,784t）を大きく下回った。一方、2025年11～12月の黒潮系暖水平均北限緯度は38.8°であり、前年（40.0°）及び過去5か年平均（39.2°）と比較して低く、黒潮系暖水の北偏傾向はやや緩和された状況であった。このことから、海況面ではマサバが伊豆諸島海域へ来遊しやすい環境にあったと考えられる。

これらの条件を踏まえて統計的に予測した結果、伊豆諸島海域におけるたもすくい漁1人当たり漁獲量は241kg（95%信頼区間：171～339kg）と推定され、前年（114kg）を上回る値となった（図7）。

現在、伊豆諸島海域では上記の統計解析に使用した標本船2隻によるたもすくい漁が漁獲の大半を占めており、2025年は全体178tのうち136tと、全体の76%を占めている（表4）。2026年においても、これらの標本船が主力となり、両船の努力量（乗船人数及び延べ隻数）が前年と同程度で推移すると仮定した場合、前述の数値計算による1人当た

り漁獲量を基に、当海域全体のマサバ漁獲量は377t ($241\text{kg} \times 14\text{人} \times 85\text{隻} \div 0.76$) と見積もられる。

しかし、2025年10～12月の銚子漁港におけるマサバの尾叉長組成をみると、30cm以上の大型個体が占める割合は14%と、前年(28%)を大きく下回っていた(図1)。このことから、銚子漁港で水揚げされたマサバの多くは未成魚であり、伊豆諸島海域へ来遊可能な成魚群は限定的であると考えられる。

さらに、伊豆諸島海域への来遊後(1～6月)の海況については、黒潮が3月頃までC型流路で推移すると予測されており、このような場合、当海域の水温は低下し、漁場形成に不利に働くことが知られている(関東近海のさば漁業総集編 2011)。

以上を踏まえると、統計的予測による漁獲量推定値(377t)は上限的な値と位置づけられ、実際のマサバ来遊量及び漁獲量は、前年並の178t程度にとどまる可能性が高い。この場合、1月1日時点の推定親魚量に対する漁獲割合(漁獲量/推定親魚量)は約0.1%と見込まれる(図2、図3)。

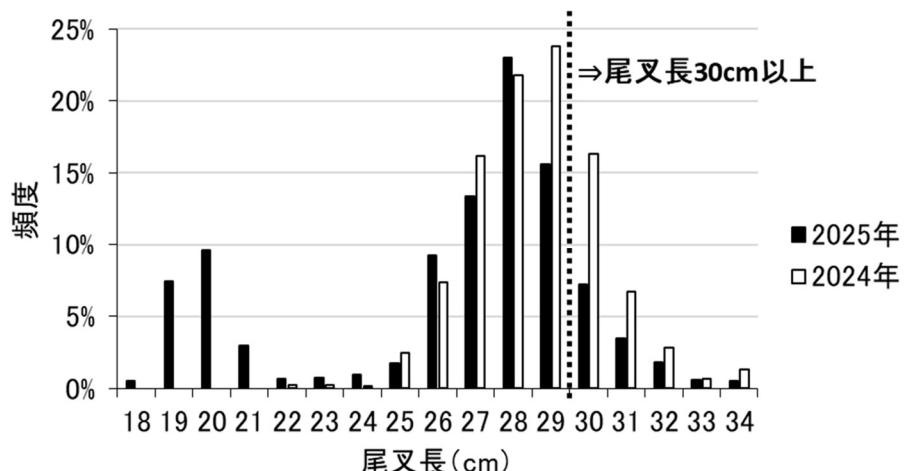


図1 10～12月に銚子漁港に水揚げされたマサバの尾叉長組成(漁獲量で引き延ばし)

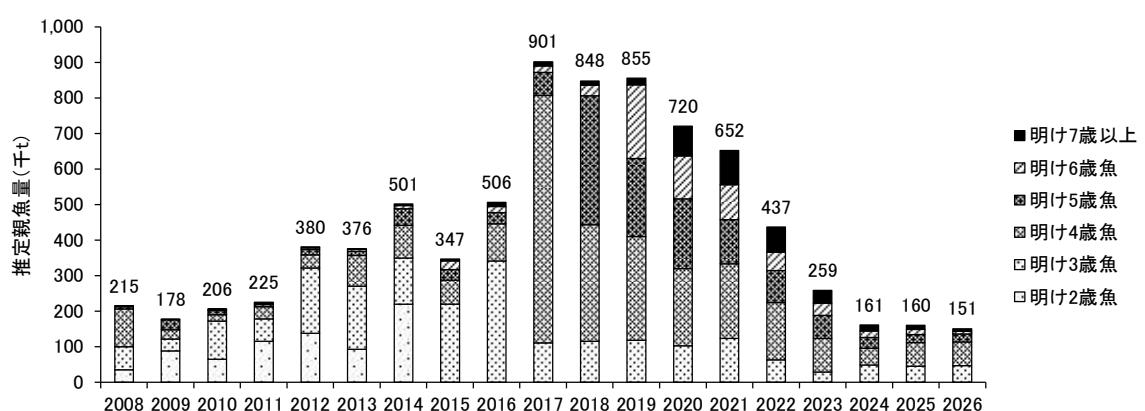


図2 マサバ太平洋系群の1月1日時点推定親魚量の推移

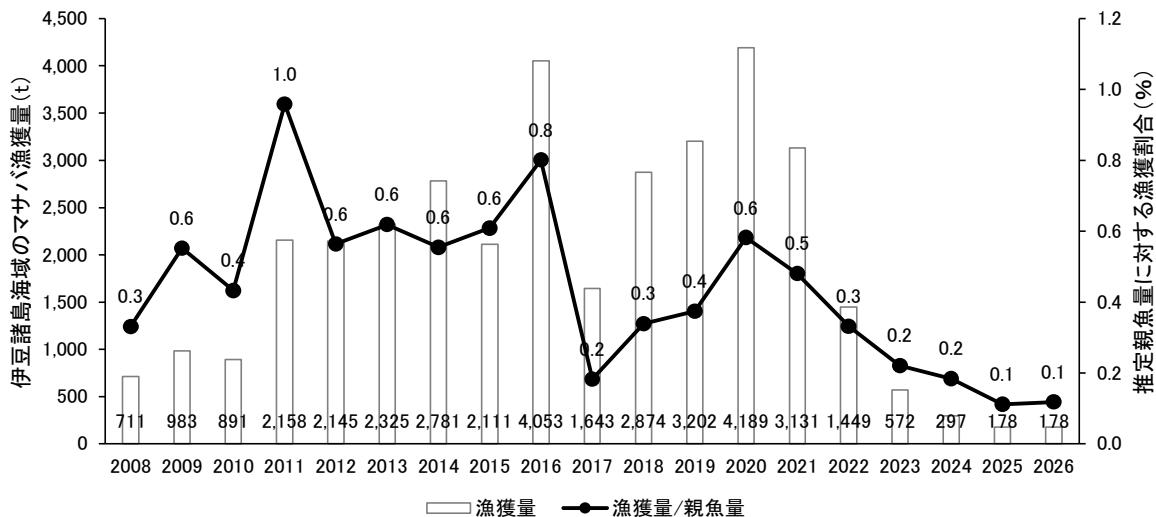


図3 推定親魚量に対する伊豆諸島海域におけるマサバ漁獲量割合（2026年は推定値）

漁期・漁場

初漁日：伊豆諸島海域における2026年のマサバ初漁日（漁期で初めてまとまった漁獲がみられる日）は、1月下旬から2月上旬に形成される可能性が高いと予測される。これは、近年みられた黒潮系暖水の北偏傾向が弱まっていることに加え、12月時点における北部太平洋まき網漁業のさば類の漁場形成位置及び水温の状況が、過去に初漁が比較的早かった年と類似しているためである。

マサバ初漁日は、黒潮が北偏傾向を示した近年において遅くなる傾向が認められている（表1）。また、黒潮系暖水の挙動がマサバの来遊動向に関係していることは、これまでの研究においても報告されている（佐藤 1972；奥田ほか 1988；奥西ほか 2020；水産研究・教育機構 2025）。

前年11～12月における黒潮系暖水の平均北限緯度と初漁日との関係を用いて統計的に予測した場合、2026年の初漁日は2月9日と算出された（図8）。特に、2022～2024年にかけて顕著であった黒潮の北偏傾向が、2025年末には解消されたことから、2026年の初漁日は近年と比べて早まる可能性があると考えられる。

次に、2025年12月時点におけるマサバの来遊状況をみると、北部太平洋まき網の漁場は犬吠埼沖を中心に形成されており（図4）、この漁場位置は2021年と類似している。また、当該漁場の水温（約17°C）も同年と近い水準であった。2021年12月時点の南下状況を反映した2022年の伊豆諸島海域における初漁日は1月30日であり、2026年において初漁日が1月下旬頃となる可能性が示唆される。

一方、12月の犬吠埼沖で漁獲されたマサバの尾叉長組成は、27～29cm及び20～22cmにピークを持つ二峰型を示しており、大型個体は極めて少ない状況であった（図5）。また年明け後1月7～8日の銚子漁港の水揚げにおいても小型（17～23cm）が主体であった。このことから、当該群の大半は南下群である可能性は低いと考えられる。しかし、現時点では南下群と考えられる大型個体のまとまった漁獲は確認されておらず、限られた情報から

の判断となる。

以上のことから、黒潮系暖水の北限緯度に基づく統計的予測結果と、12月時点における漁場位置及び漁場水温の状況を総合的に踏まえると、2026年年の伊豆諸島海域におけるマサバ初漁日は、1月下旬から2月上旬に形成されると予測される。

表1 マサバ初漁日の漁場及び水温

| | 初漁日 | 漁場 | 漁場水温(°C) |
|-------|-------|------|----------|
| 2015年 | 2月1日 | 三本 | 18.2 |
| 2016年 | 1月28日 | 三本 | 19.1 |
| 2017年 | 2月4日 | 三本 | 16.0 |
| 2018年 | 1月27日 | 三本 | 18.7 |
| 2019年 | 1月24日 | 利島 | 19.6 |
| 2020年 | 1月22日 | 利島 | 19.0 |
| 2021年 | 1月31日 | 大室出し | 19.2 |
| 2022年 | 1月30日 | 利島 | 19.6 |
| 2023年 | 2月12日 | 利島 | 18.2 |
| 2024年 | 2月18日 | 大島千波 | 18.5 |
| 2025年 | 2月24日 | 利島 | 16.8 |

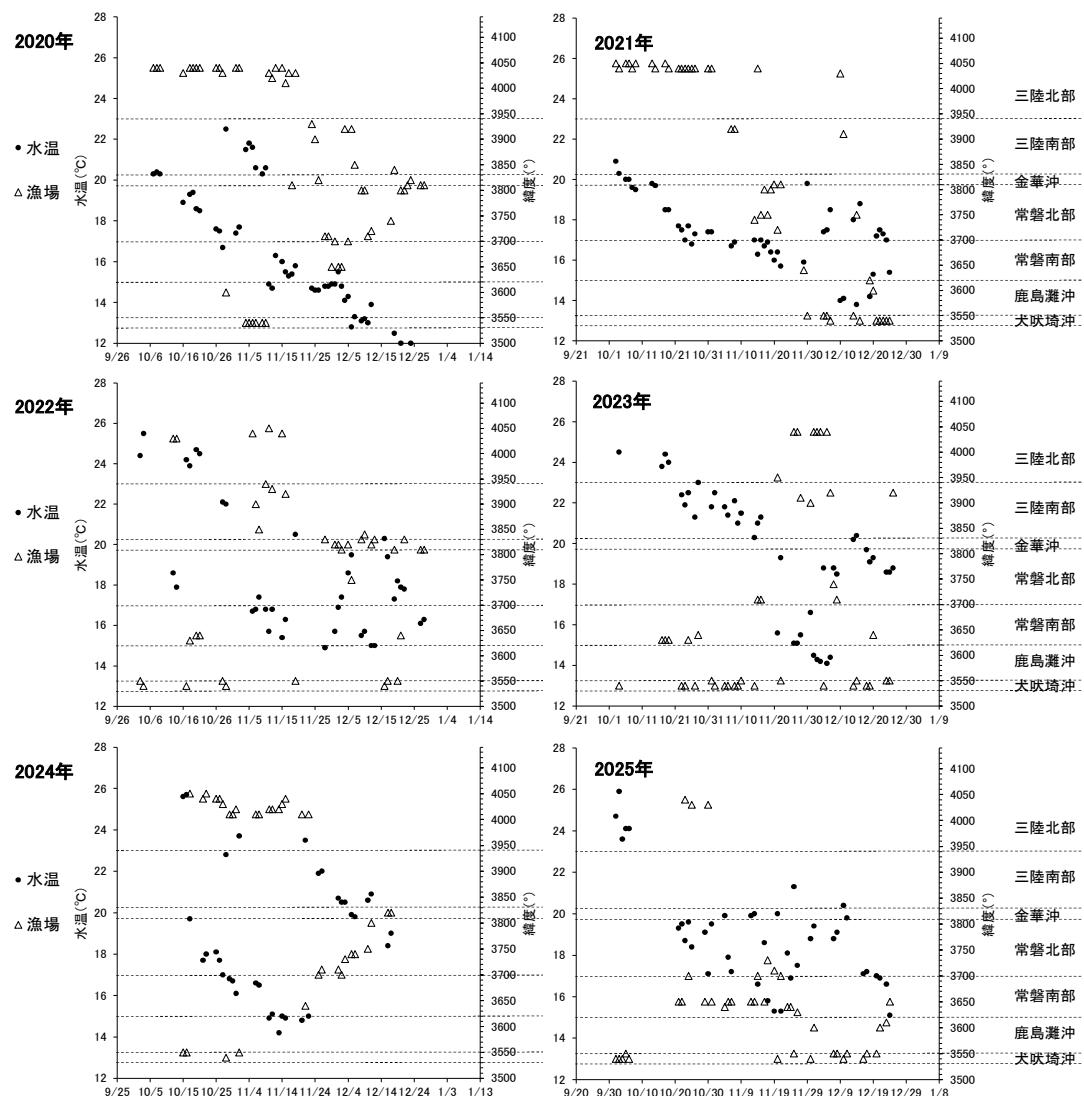


図4 伊豆諸島漁期直前（10～12月）の北部太平洋まき網漁場位置と漁場水温推移

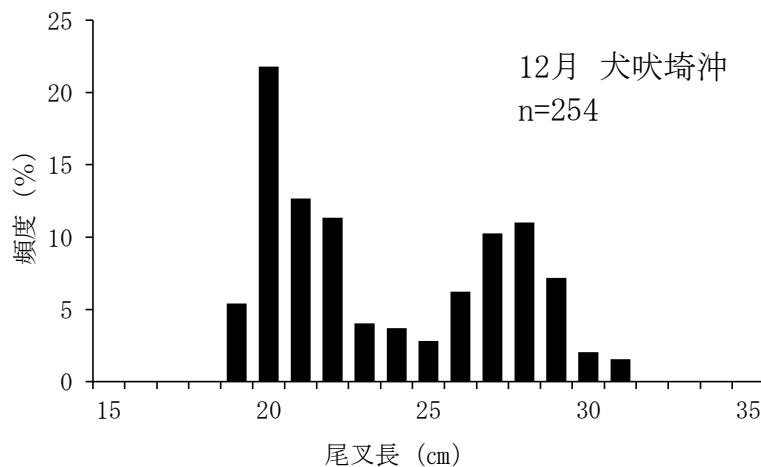


図5 12月犬吠埼沖で漁獲されたマサバ尾叉長組成(3回の水揚げを漁獲量で引き延ばし)

漁場：マサバの伊豆諸島海域における漁場は、マサバ太平洋系群の資源量や黒潮流路に起因する漁場水温の変動等により、年ごとに移り変わる傾向がある。近年のマサバ漁場は、伊豆諸島海域の北部に位置する大島千波や利島周辺に集中している。1990～2010年の資源低迷期においても、同様に北部海域が主漁場であったこと、さらに現在も資源量が低水準にあることを踏まえると、資源量が少ない年には北部海域で漁場が形成されやすいことが示唆される。

また、例年1～2月のマサバ中熟期には水温16°Cを超える暖水が波及する瀬に集群し、3月以降の産卵盛期には18～20°Cの暖水が波及する瀬に集群して好漁となることが知られている。

マサバ初漁日として予測された1月30日及び2月9日時点の漁場水温をみると、黒潮は典型的なC型流路を示しており、伊豆諸島海域は16～17°Cの水温で概ね覆われている(図6)。また、南部に位置する三宅島周辺には、黒潮由来の等温線が密に接近している状況が認められる。経験的に、黒潮流軸に近く暖水が波及する海域では漁場が形成されやすいとされており、漁期当初の漁場は三宅島周辺に形成される可能性がある。

2月20日時点においても同様の水温分布が継続しており(図6)、黒潮のC型流路は3月まで継続することが予測されている。このため、黒潮流路がN型基調へ移行するまでの期間は、三宅島周辺で漁場が継続する可能性がある。一方で、C型流路が長期間継続した場合には、当海域が冷水に覆われることで漁況が低調となり、マサバ魚群が好適水温帯を求めて西方へ移動する可能性も指摘されている(加藤ほか 2018)。その場合、魚群は熊野灘方面まで移動し、伊豆諸島海域における漁場形成はほとんど見られなくなる可能性がある。

一方、黒潮がN型基調へ移行した場合には、北部海域まで黒潮由来の暖水が波及し、近年の傾向を踏襲して、北部海域(大島千波や利島周辺)が主漁場となると考えられる。

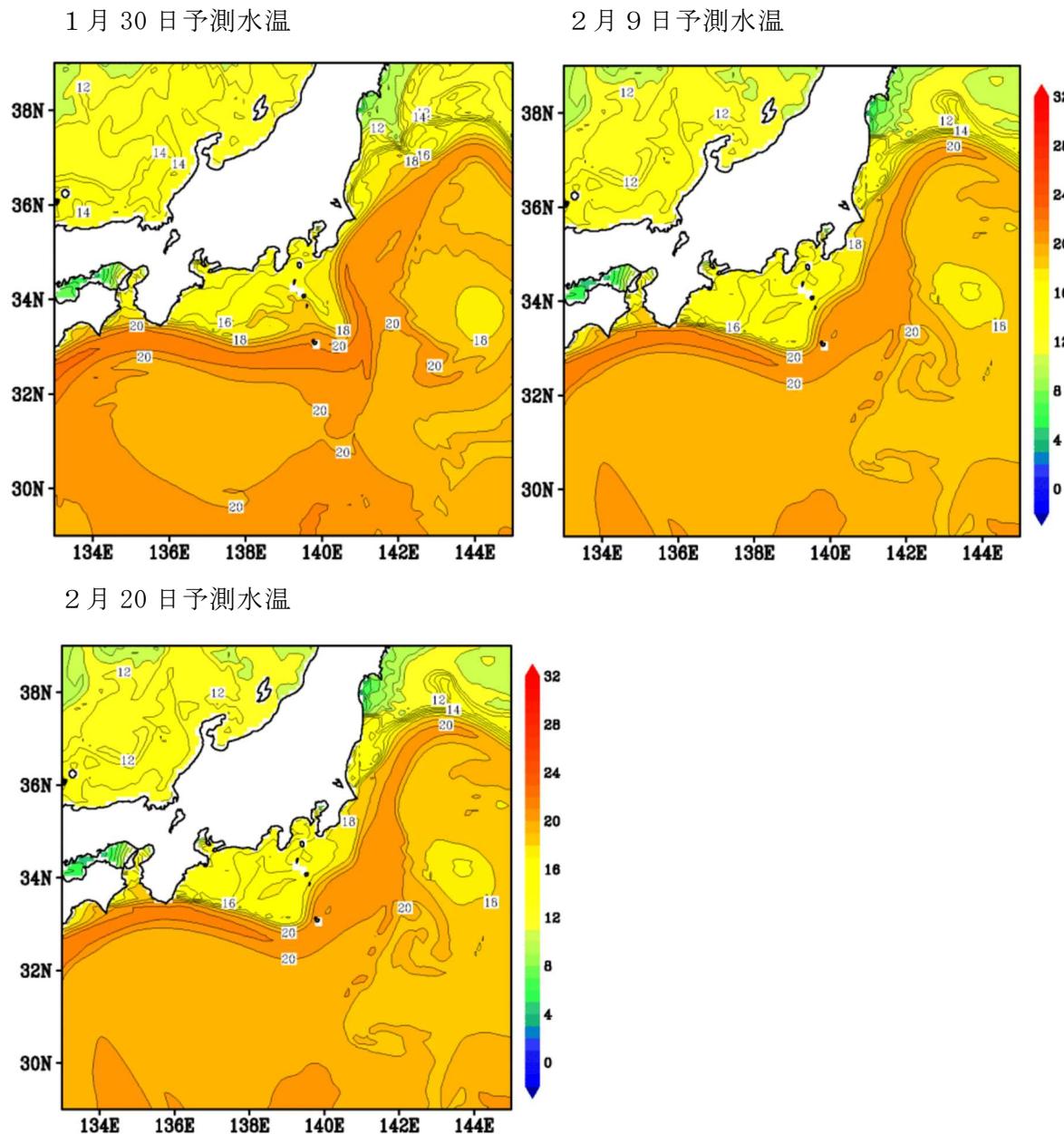


図 6 FRA-ROMS II による海面水温予報 (参照日 : 2026/1/6)

魚体

マサバ太平洋系群の1月1日時点における推定親魚量をみると(図2)、2026年は3、4歳魚が主体であり、これに5歳以上の高齢魚も混じる年齢構成となっている。

また、2025年10～12月に銚子漁港へ水揚げされたマサバの年齢査定結果をみると(表2)、2、3歳魚(明け3、4歳魚)が主体であり、南下群の魚体サイズには、これら年級群の尾叉長組成が反映されると見込まれる。

2025年10～12月に銚子漁港へ水揚げされたマサバの尾叉長は、2、3歳魚で25～35cmの範囲に分布し、4歳以上では概ね29cm以上であった。これらの個体は年明け1月以降に多少成長すると考えられることから、2026年1～6月に伊豆諸島海域で漁獲される

マサバは、27~36 cm 程度の明け3歳魚及び明け4歳魚が主体となり、これに31 cm 以上の明け5歳以上の個体も混じると予測される。

表2 2025年10~12月に銚子漁港で水揚げされたマサバの尾叉長別年齢組成

| 尾叉長 | 0歳魚 | 1歳魚 | 2歳魚 | 3歳魚 | 4歳魚 | 5歳魚 | 6歳魚 |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 16cm | | | | | | | |
| 17cm | | | | | | | |
| 18cm | | | | | | | |
| 19cm | | | | | | | |
| 20cm | | | | | | | |
| 21cm | | | | | | | |
| 22cm | | | | | | | |
| 23cm | | | | | | | |
| 24cm | | 3 | | | | | |
| 25cm | | 1 | 4 | | | | |
| 26cm | | 4 | 8 | | | | |
| 27cm | 1 | 16 | 5 | | | | |
| 28cm | 1 | 23 | 7 | | | | |
| 29cm | 1 | 24 | 17 | 1 | | | |
| 30cm | 1 | 11 | 10 | | | | |
| 31cm | | 6 | 9 | | 1 | | |
| 32cm | | 6 | 12 | 2 | | | 1 |
| 33cm | | 1 | 3 | 4 | | | |
| 34cm | | | 3 | 1 | | | |
| 35cm | | | 1 | | | | |
| 36cm | | | | 2 | 1 | | |
| 37cm | | | | | | | |
| 38cm | | | | | 1 | | |
| 39cm | | | | | | 2 | |
| 40cm | | | | | | 1 | |
| 合計 | 0 | 12 | 99 | 67 | 10 | 6 | 1 |

北上期

伊豆諸島海域では、漁場水温が20°C以上になるとマサバが北上を開始し、漁場が消滅することが知られている。海況の予報によれば、4月以降は黒潮がN型基調となり、当海域へ暖水が波及する見込みである。

2025年においても、4月中旬の暖水波及により漁場水温が20°Cに達し、北部漁場で一時的にマサバの漁獲が盛期を迎えた後、漁況は徐々に低調となった。このことから、本種は同時期に北上を開始した可能性が示唆される。2026年においても、海況が予報どおり推移した場合、黒潮がN型基調となる4月上旬～中旬頃に北上を開始する可能性が高い。

一方、熊野灘など伊豆諸島より西方海域へ回遊した大型個体が、5月以降に再び伊豆諸島海域へ来遊する場合がある。3月に黒潮がC型で流れ、伊豆諸島以西へ群れが抜けやすい本年は、この現象が生じやすいと考えられる。

【マサバ予測の考え方】

来遊量の予測モデル（一般化線形モデル）

2026年1~6月のマサバ来遊量は、以下の変数を用いた一般化線形モデル（GLM）を構築して推定した。

（モデル式）たもすくいCPUE \sim (A) 銚子マサバ水揚量 + (B) 黒潮北限緯度

（目的変数）伊豆諸島海域でのたもすくい漁1人当たり漁獲量 (kg/人・日)

（説明変数A）前年10~12月における銚子漁港のマサバ水揚量 (t)

（説明変数B）前年11~12月の黒潮系暖水平均北限緯度 (°)

本モデルでは、目的変数にガンマ分布、リンク関数に対数リンクを用い、AICcを基準としてベストモデルを選択した。説明変数Aは、伊豆諸島海域への来遊前に三陸～犬吠埼沖海域で漁獲対象となるマサバ群の規模を表す指標であり、説明変数Bは、11~12月におけるマサバ

の南下移動のしやすさを表す指標である。これらを用いて、伊豆諸島海域におけるたもすくい漁の漁況を推定した（表3、表4、図7）。

表3 一般化線形モデルで使用したデータセットと予測値

| 年 | 一般化線形モデル データセット | | | ※参考 | | | | |
|------|------------------|-------------------------|--------------------------|-------------|-------------|------------|-------------|------------|
| | CPUE (kg/人・日) | A.銚子漁港 マサバ水揚量 (t) | B.黒潮系暖水平均 北限緯度 (°) | 標本船たもすくい操業時 | 伊豆諸島海域全体 | | | |
| | | | | 平均人數 (人) | 延べ隻数 (隻) | 漁獲量 (t) | 延べ隻数 (隻) | 漁獲量 (t) |
| 2010 | 262 | 23,210 | 37.7 | 15 | 41 | 159 | 300 | 891 |
| 2011 | 641 | 40,852 | 37.8 | 11 | 80 | 561 | 241 | 2,158 |
| 2012 | 913 | 16,510 | 37.2 | 13 | 74 | 874 | 171 | 2,145 |
| 2013 | 821 | 35,225 | 38.4 | 10 | 88 | 726 | 215 | 2,325 |
| 2014 | 1,263 | 35,214 | 37.8 | 11 | 85 | 1,208 | 236 | 2,781 |
| 2015 | 1,808 | 58,755 | 38.1 | 11 | 70 | 1,365 | 159 | 2,111 |
| 2016 | 2,492 | 56,176 | 38.3 | 9 | 90 | 2,096 | 317 | 4,053 |
| 2017 | 1,283 | 69,531 | 38.5 | 11 | 80 | 1,157 | 188 | 1,643 |
| 2018 | 2,125 | 53,228 | 37.3 | 9 | 77 | 1,484 | 272 | 2,874 |
| 2019 | 2,196 | 41,344 | 36.8 | 9 | 89 | 1,691 | 259 | 3,202 |
| 2020 | 1,634 | 46,551 | 37.3 | 13 | 103 | 2,229 | 286 | 4,189 |
| 2021 | 988 | 31,931 | 38.7 | 14 | 120 | 1,707 | 311 | 3,131 |
| 2022 | 573 | 30,798 | 38.0 | 14 | 114 | 935 | 230 | 1,449 |
| 2023 | 232 | 5,512 | 39.1 | 14 | 131 | 425 | 296 | 572 |
| 2024 | 130 | 10,848 | 40.3 | 15 | 116 | 234 | 242 | 297 |
| 2025 | 114 | 4,833 | 40.0 | 14 | 85 | 136 | 221 | 178 |
| 2026 | 241(予測値) | 5,864 | 38.8 | | | | | |

※標本船たもすくい操業時漁獲量=CPUE×平均人數×標本船延べ隻数

表4 一般化線形モデルの係数

| 変数名 | 推定値 | 標準誤差 | t 値 | 有意性 |
|-------------------|-----------|-----------|------|-----|
| 切片 (Intercept) | 23 | 4.5 | 5.2 | *** |
| A. 銚子漁港マサバ水揚量(t) | 0.0000032 | 0.0000057 | 5.61 | *** |
| B. 黒潮系暖水平均北限緯度(°) | -0.46 | 0.11 | -4.1 | ** |

***:p < 0.001, **:p < 0.01, *:p < 0.05

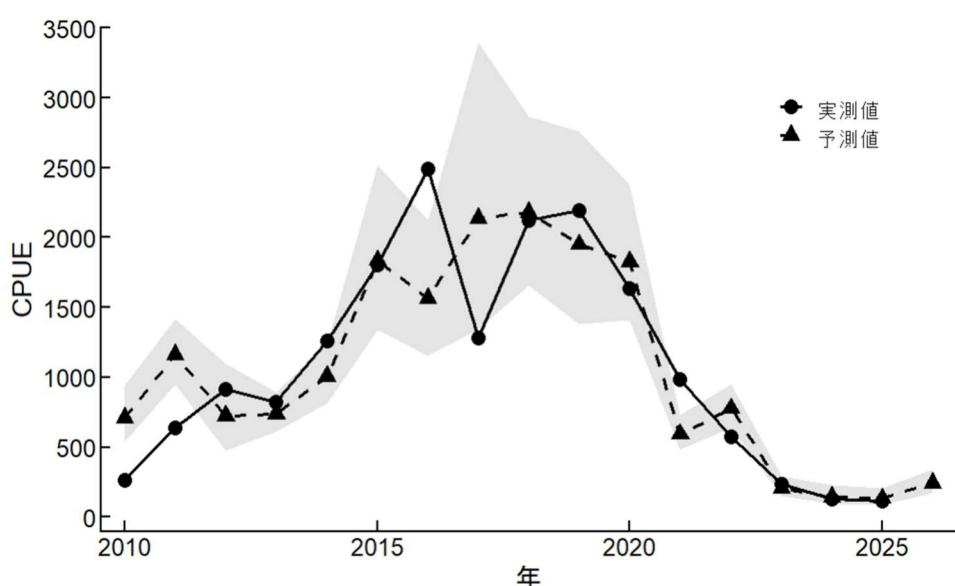


図7 一般化線形モデルの予測値と実測値の推移

※影はデルタ法により求めた95%信頼区間

マサバ推定親魚量

昨年6月末時点のマサバ資源尾数から、7～12月の漁獲尾数及び自然死亡尾数を減じた尾数を年末時のマサバ資源尾数とする（水研機構データ）。これに、各年齢の平均体重を乗じた量を資源量とする。これに、各年に対応した年齢別成熟率（2026年は1～2歳0%、3歳30%、4歳以上100%）を乗じて、マサバ推定親魚量とする。

伊豆諸島海域でのたもすくい漁1人当たり漁獲量（kg/人・日）※GLMの目的変数

静岡県船（総t数99t）及び千葉県船（総t数120t）の標本船日誌（静岡県船：2014～2025年、千葉県船：2010～2025年）を用い、1～6月のマサバ漁獲量をさば類（マサバあるいはゴマサバ）漁獲時の延べ操業人数で除して算出した。操業記録は、伊豆諸島海域の主要漁場（大島千波、利島、ひょうたん瀬、三宅島、三本、銭洲など）を含む東経138度30分～140度、北緯33度～35度の範囲に限定した。

前年10～12月における銚子漁港のマサバ水揚量（t）※GLMの説明変数A

北部太平洋まき網漁業協同組合連合会から提供された銚子漁港におけるさば類水揚量に対し、同漁港で月別に実施しているサンプリングに基づくマサバ構成比を乗じることで、当該月のマサバ水揚量を算出した。また、サンプリングを実施できなかった月については、前月の構成比を引用して補完した。

前年11～12月の黒潮系暖水平均北限緯度（°）※GLMの説明変数B

気象庁が公表する「海洋の健康診断表」に基づき、前年11～12月の上旬・中旬・下旬における、日本の東方に位置する黒潮系暖水の北限緯度（東経142～147度における、水深100mの水温15°C以上の北限緯度）を抽出し、その平均値を指標として用いた。

伊豆諸島海域のマサバ漁獲量

漁獲割合（親魚量に対する漁獲量の比率）は、2000年代前半は0.05%以下で推移していた。2011年以降の漁獲割合は0.11～0.96%の間で推移しており、直近5か年（2021～2025年）の平均漁獲割合は0.27%である。

初漁日の予測

2010～2025年におけるマサバ南下期（11～12月）の黒潮系暖水の平均北限緯度（「海洋の健康診断表」に基づく）と、初漁日までの日数（初漁日～1月1日）との間には、相関係数0.77の正の相関が認められた（図8）。すなわち、黒潮系暖水が北偏するほど、初漁日が遅くなる傾向が示された。

この回帰式に2025年11～12月の平均北限緯度（38.7°）を代入した結果、2026年の初漁日は2月9日と予測された（図8）。

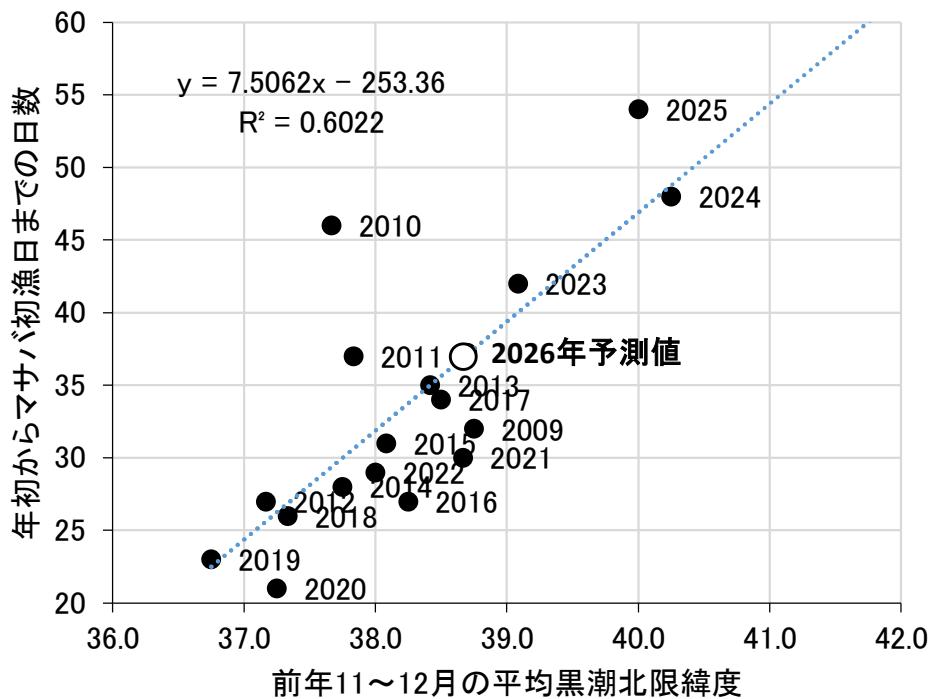


図8 平均黒潮北限緯度とマサバ初漁日との関係

初漁日、漁場

- 漁期初めの1～2月におけるマサバの集群は黒潮系暖水の影響下(16°C以上)の瀬にみられ漁場が形成される。【過去10か年(2016～2025年)の初漁時の漁場水温は16.0～19.6°C(平均18.5°C)】
- 2012年までは、漁期初め(産卵期前、1、2月)の漁場は、ほとんどがひょうたん瀬～大室出しであった。【2013～2015年は北部海域が低水温となり、三宅島周辺海域で初漁がみられた。産卵盛期には、三宅島周辺海域に漁場が形成されることが多い。】
- 親魚量が増加傾向にある2016年漁期には、初期漁場は三宅島周辺海域、盛漁期には錢洲海域にも形成された。過去の親魚量高水準期にも同様の傾向が見られた。
- 漁期後半は、北部海域が主漁場となる。【ただし、北部海域が継続して冷水域に覆われると、三宅島周辺海域で漁場形成が継続する。】
- 犬吠埼以北の水温が高いと南下しない場合がある。【2008年漁期は1、2月に常盤海域～鹿島灘に暖水が波及していたため、南下しなかった。】
- 2019年以降の初期漁場は北部海域の利島もしくは大室出しで漁場形成されている。2017年からの黒潮大蛇行期以降、黒潮が錢洲～三宅島周辺海域を通過することが多くなり、漁期初めには、北部海域に適水温帯が形成されることが多くなった。

漁況

中熟期は水温が16°Cを超える暖水が波及する瀬に、産卵盛期には18~20°Cの暖水が波及する瀬に集群して、好漁となる。

魚体

漁獲物の体長組成から、大型個体が小型個体より先に来遊する。漁期終盤には、大型個体の割合が増える。

北上期

伊豆諸島海域の水温が20°C以上になるとマサバは北上を開始し、漁場が消滅する。通常5、6月の伊豆諸島線上における黒潮流軸の水温は22°Cから25°Cに昇温するため漁場は消滅する。ただし、当海域が冷水渦に覆われる場合は漁場が継続することがある（例：2007年漁期）。

その他

予報及び漁況経過における前年比の目安は表5のとおりとする。

表5 資源（親魚）量、来遊量及び漁獲量の評価の目安

| 予 報 | 前年比 | 漁況経過 | 前年比 |
|--------|-----------------|-----------|-----------------|
| 前年を下回る | -20%以下 | 前年を大きく下回る | -20%以下 |
| 前年並 | -20%より大きく+20%未満 | 前年を下回る | -20%より大きく-10%以下 |
| 前年を上回る | +20%以上 | 前年並 | -10%より大きく+10%未満 |
| | | 前年を上回る | +10%以上+20%未満 |
| | | 前年を大きく上回る | +20%以上 |

【マサバ資源管理】

1990年頃から低迷が続いているマサバ太平洋系群の資源量は、2013年級群の高い加入量を契機として、資源量及び親魚量ともに増加傾向で推移してきた。しかし、2018年以降は再び減少傾向に転じている。

資源量減少の主な要因としては、成長の遅れの影響が大きいと考えられている。加えて、近年の資源評価では、中国及びロシアの外国漁船による漁獲情報の精緻化が進んだことや、伊豆諸島海域におけるたもすくい漁業のCPUE、日本の太平洋側におけるマサバ卵の出現量など、複数の資源量指標値が近年低水準で推移していることを受け、資源評価が下方修正された。

2025年度の資源評価によれば、2024年の親魚量は9.7万tと推定され、目標管理基準値（48.2万t）を大きく下回っている。また、漁獲圧についても過剰な状態にあると判断されている。今後、親魚量を安定的に維持・増大させ、加入量の安定を図るためには、未成魚の保護をはじめとする資源管理措置を継続的に実施していくことが重要である。

②ゴマサバ

【予測（2026年1～6月）】

(ア) 来遊量と漁獲量

前年並。

(イ) 漁期・漁場

期間を通じて、三宅島周辺海域に漁場が形成される。黒潮流路によっては伊豆諸島北部海域にも形成されることがある。

(ウ) 魚体

3歳魚（29～37cm）、4歳（31cm以上）以上が主体で、2歳魚（24～34cm）が混じる。

※年齢は年初に加齢し2026年1月時点を表す。魚体は尾叉長で表す。

【説明】

来遊量と漁獲量

図2からは2026年1～6月の棒受網CPUEは2025年1～6月を上回ると考えられる。しかし、2023年からは棒受網操業が著しく減少しており、7～11月の漁模様を反映できていないと考えられる。また、2025年7～11月の棒受網・たもすくい漁の漁況経過が芳しくなかったため、低調であった前年並と考えられる。

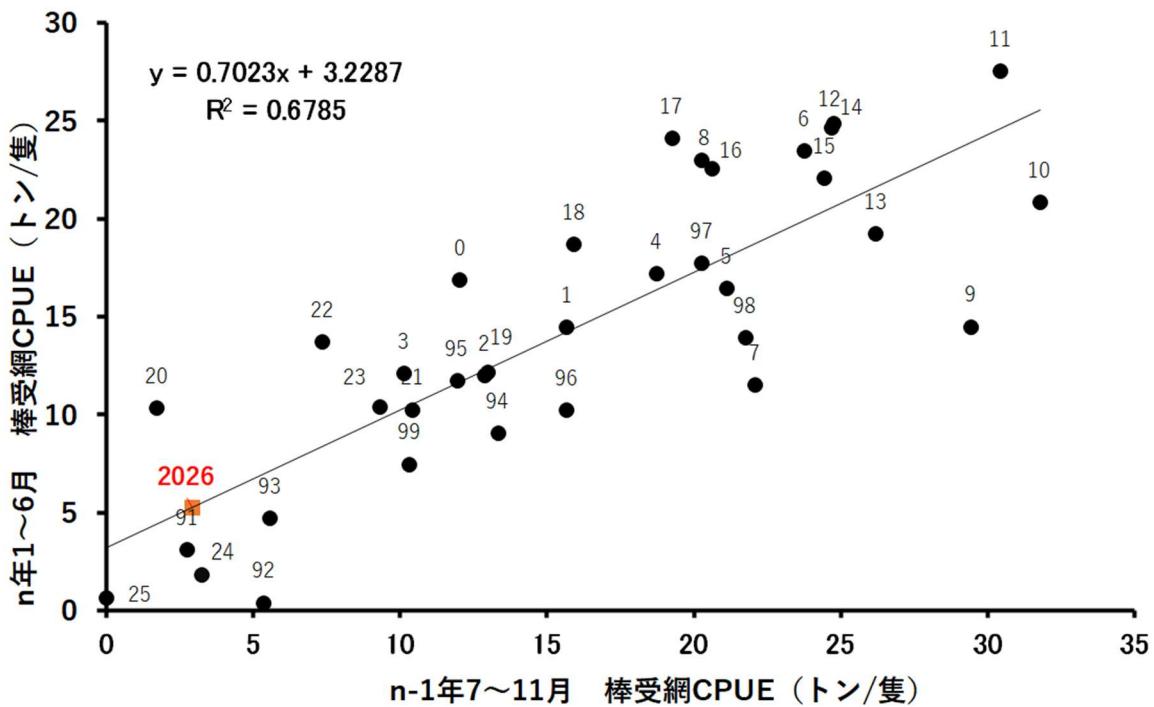


図9 (n-1) 年 7～11 月の棒受網 CPUE と n 年 1～6 月の棒受網 CPUE との関係
＊図中の数字は年を示す。

漁期・漁場

7～11 月の棒受網・たもすくい漁業の漁場形成状況及び 1～6 月の海況予測から予測した。

魚体

魚体は最近 5 年の 1～6 月の漁獲物の尾叉長組成から判断した。また、年齢に関しても最近 5 年の Age-Length-Key の平均から判断した。

2 経過と現況(2025 年 7 月以降)

(1) 海況

黒潮は、9 月中旬の一時的な A 型を除けば、7～11 月中旬まで C 型で経過し、その後 B 型となった。伊豆諸島北部海域周辺では、12 月上旬を除けば、黒潮は三宅島や御蔵島より東側を北上した。このため、黒潮からの暖水波及が弱まり、同海域の沿岸水温は平年よりやや低め～平年並となった。房総沖では、C 型時は離岸し、B 型時は接岸した。

1 月 7 日現在、黒潮は潮岬を通過後、遠州灘から伊豆半島沖を東進している。八丈島付近で向きを北東に変え、三宅島や御蔵島の東側を北上した後、房総半島の沿岸を流れている。水温は、伊豆諸島北部海域は 16～18°C、三宅島周辺は 19～20°C、銭洲海域は 16°C 前後になっている。

(2) 漁況

(ア) 秋季まき網漁業

北部まき網による7～11月のさば類水揚量は8,900t（昨年同期14,650t）であった。そのうち銚子漁港のさば類水揚量は5,134t（昨年同期3,104t）で、標本重量比から推定した水揚量は、マサバが4,978t、ゴマサバが156t（昨年同期マサバ：2,443t、ゴマサバ：661t）であった。なお、水揚量は12月末時点でも散発的であり、昨年同様に低水準である。11月下旬～12月中旬の1投網あたりの平均漁獲量は5.6t（前年同期：20.2t）であった。銚子漁港におけるまき網漁獲物のマサバ・ゴマサバ重量比率は、2025年1月から6月まではマサバが93%、7月から11月までは98%であった。

漁場形成は、7～9月は極めて低調であった。10月から常磐南部を中心に11月まで漁場が形成された。12月は低調ながら犬吠埼沖～鹿島灘沖に漁場が形成された。12月下旬時点で本格的な南下群を対象にした操業にはならず、銚子港への1日3,000tを越える水揚げはなかった。北部まき網全体でも1日3,000tを超える水揚げはなかった。

2025年12月の緯度経度5分ごとで集計した漁場水温の平均は18.7°C（前年：20.2°C、2020～2024年平均：17.3°C）であった。

北部まき網において2025年11月に漁獲されたマサバは、尾叉長25～32cmの年明け3歳魚（2023年級群）から年明け4歳魚（2022年級群）が主体であった。12月は、尾叉長27～29cm及び20～22cmの二峰型を示した（図5）。いずれの月においても、南下群と考えられる大型個体（尾叉長30cm以上）は極めて少なかった。

年明け後は、1月6日夜の操業からさば類の漁獲がみられ、常磐南部を中心に漁場が形成されている。漁獲はいわし類が主体であり、さば類は最大でも1投網あたり25t程度であった。魚体は17～23cmの当歳魚と思われる個体が大半であった。

(イ) 沿岸さば釣り

神奈川県の主要3港（松輪、三崎、長井）における一本釣りによるマサバの漁獲量は0.1tで、前年（7.4t）、平年（12.2t）を大きく下回り、ゴマサバの漁獲量も0.1tで、前年（4.2t）、平年（5.6t）を大きく下回り、ほとんど漁獲がない状態となった。これはさば類狙いの出漁を見合わせ、ほかの漁獲対象へシフトした結果とみられる。

千葉県外房海域のハイカラ釣りは、前年と同様に12月は出漁していない。

(ウ) 定置網

神奈川県の主要4港（三崎、長井、佐島、真鶴）の定置網によるマサバ漁獲量は309tで、前年（108t）を大きく上回り、過去5年平均（以下、平年）（257t）も上回った。ゴマサバ漁獲量は51tで、前年（76t）を下回り、平年（153t）を大きく下回った。月別に見ると、マサバは5月、8月、9月に漁が上向き、伊豆諸島海域からの来遊があったことを伺わせたが、それ以外の月は極めて低調で、低調だった前年は上回り、平年を若干上回る程度の漁獲となった。ゴマサバも同様に、8月に漁が上向いたが多くの月は極

めて低調で、過去最低水準の漁獲となった。外房沿岸の定置網では、10～12月にかけてサバナゴ銘柄の水揚げはあるものの、前年と同様に南下群と思われる大型個体の水揚げは見られなかった。

(エ) 静岡県棒受網・たもすくい網

7月は主に北部海域の利島に漁場が形成され、下旬には三本、金洲、ひょうたん瀬、御前崎沖に形成された。利島、金洲ではたもすくい、三本、ひょうたん瀬では棒受網による操業が行われた。CPUE (t/隻) は上旬 (3.9t)、中旬 (1.2t)、下旬 (1.3t) であった。8月は、ひょうたん瀬、三宅島周辺海域、大室だしに漁場が形成され、棒受網操業が行われた。CPUE は上旬 (1.3t)、中旬 (3.3t)、下旬 (1.2t) であった。9月は、上旬は御前崎沖及び金洲に漁場が形成され、CPUE は 1.2t であった。中旬はほぼ漁獲がなく、下旬に大島千波に漁場が形成され、CPUE は 0.9t であった。10月上旬も引き続き大島千波に漁場が形成され、CPUE は 1.8t であった。中旬は御前崎沖、下旬は三宅島で漁場が形成された。CPUE は中旬 (1.6t)、下旬 (2.2t) であった。11月は三宅島周辺海域で棒受網による操業が行われた。CPUE は上旬 (0.5t)、中旬 (7.2t) 下旬 (8.3t) と多少まとまった漁獲が見られた。12月は月を通じて大島千波に漁場が形成された。CPUE は上旬 (2.0t)、中旬 (3.0t)、下旬 (0.9t) であった。県内船は12月下旬に操業を終え、2025年漁期は終漁となった。

2025年7～12月における静岡県主要4港（沼津、小川、伊東、静浦）におけるさば類の水揚量は、ゴマサバ 132t（前年比：79%、平年（直近5年平均）比：18%）であった。CPUE は 2.7t（前年同期 2.7t）であった。マサバの水揚げはなかった。漁獲されたゴマサバの尾叉長範囲は 22～43cm であった。

(オ) たもすくい【神奈川県・千葉県担当】

神奈川県主要2港（長井、三崎）には、たもすくい網によるさば類の水揚げはなかった。

2025年7月～12月は、千葉県の民間船によるたもすくい漁は行われなかった。

3 漁期前調査結果

(ア) 千葉県

千葉県漁業調査船千葉丸による調査は、2025年1月8日現在行われていない。

(イ) 神奈川県

神奈川県の漁業調査指導船江の島丸による調査は、1月8日現在行われていない。

(ウ) 静岡県

静岡県沿岸・沖合漁業指導調査船駿河丸による調査は、1月8日現在実施していない。